高速戦艦「赤城」6

「赤城」永遠

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

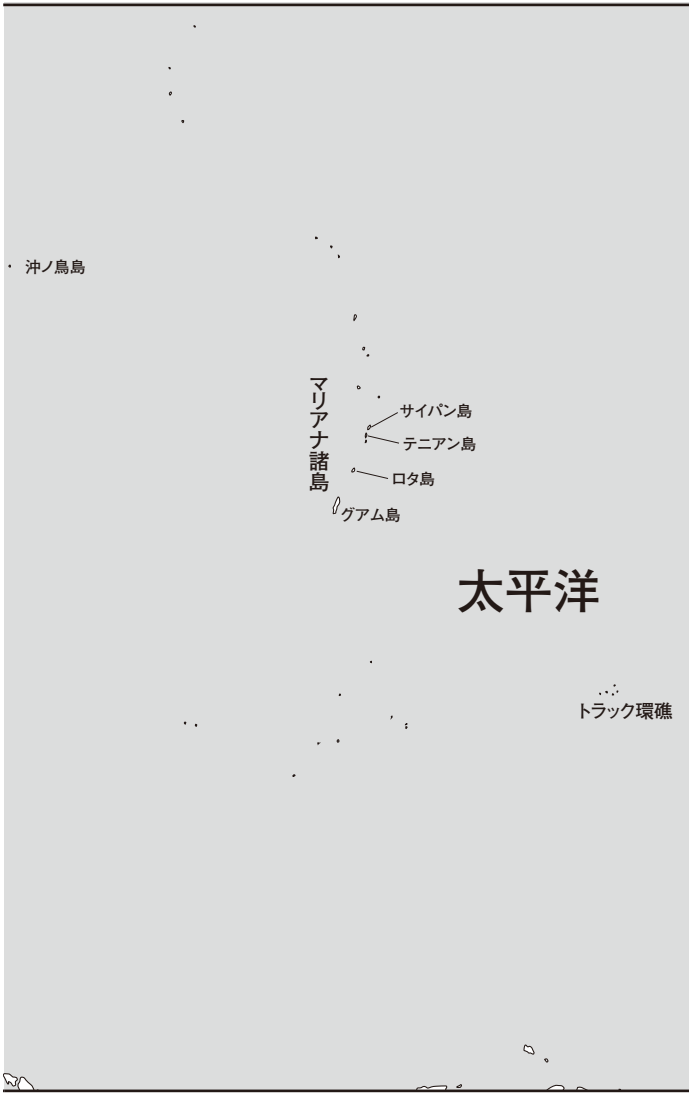
ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉　　画　佐藤道明
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

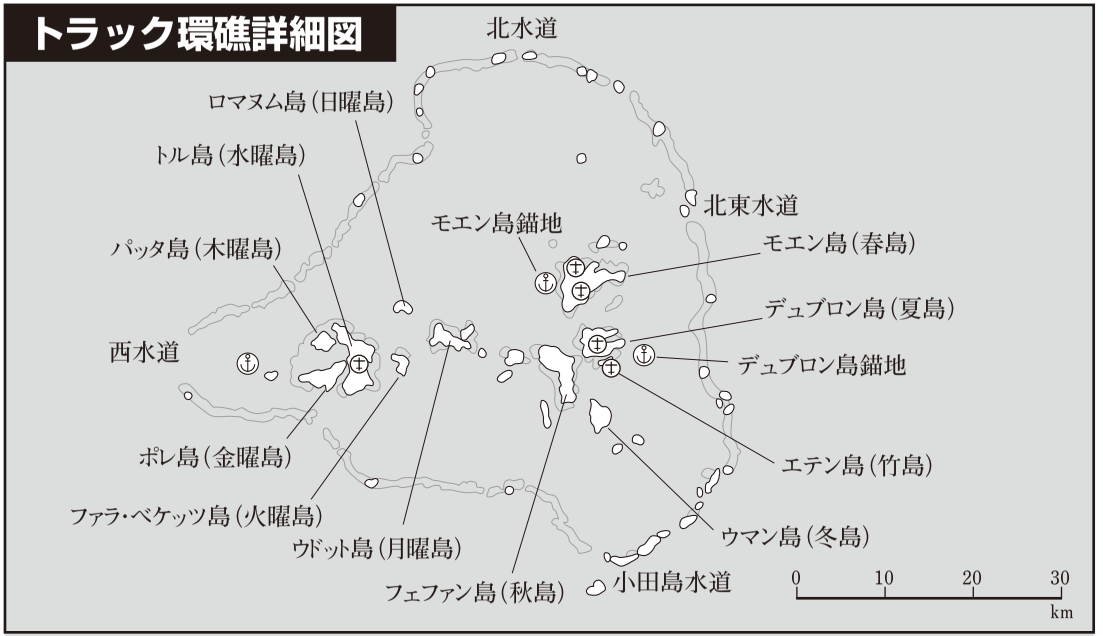
目次

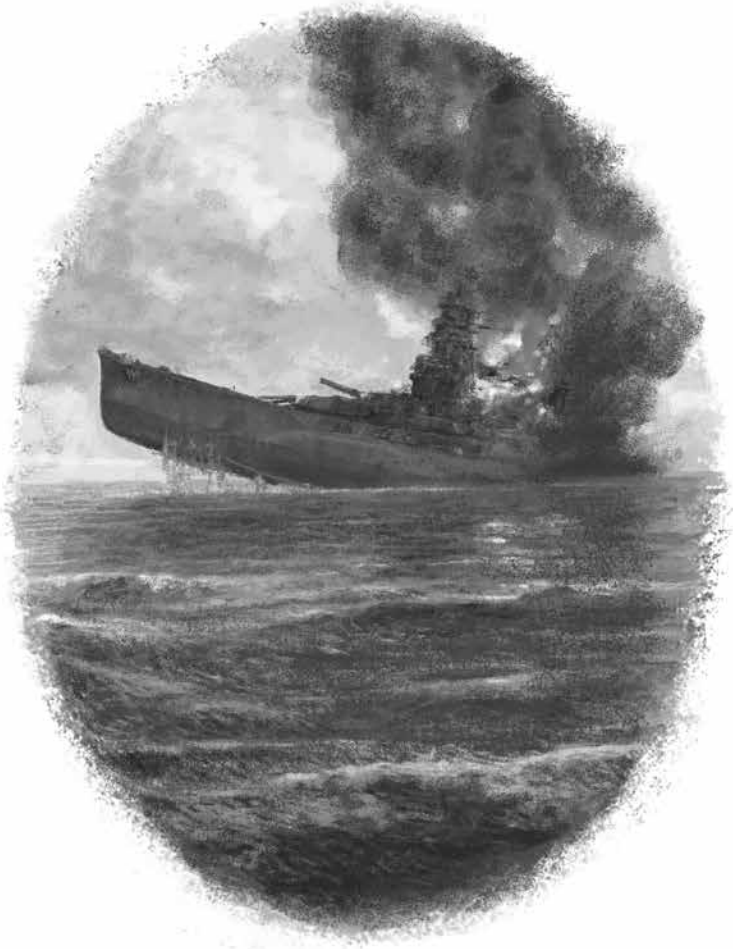
第一章　サイパンの襲撃者　9
第二章　「連合艦隊ハ健在ナリ」　53
第三章　死闘トラック沖　75
第四章　砲声消ゆるとき　125
第五章　山本五十六の放送　191
終章　207
あとがき　215


沖ノ鳥島
マリアナ諸島
サイパン島
テニアン島
ロタ島
グアム島
太平洋
トラック環礁

内南洋要域図

沖縄
台北
新竹
台湾
台南
高雄
石垣島
宮古島
西表島
南シナ海
サンティアゴ島
リンガエン湾
ルソン島
マニラ
バターン半島
コレヒドール島
フィリピン
ミンドロ島
サマール島
タクロバン
パラワン島
パナイ島
レイテ島
ネグロス島
パラオ諸島
バベルダオブ島
コロール
ペリリュー島
ミンダナオ島
モロ湾
ダバオ
ボルネオ島
セレベス海
モロタイ島
セレベス島
ハルマヘラ島


トラック環礁詳細図
北水道
ロマヌム島（日曜島）
トル島（水曜島）
北東水道
モエン島錨地
モエン島（春島）
パッタ島（木曜島）
デュブロン島（夏島）
西水道
デュブロン島錨地
ポレ島（金曜島）
エテン島（竹島）
ファラ・ベケッツ島（火曜島）
ウマン島（冬島）
ウドット島（月曜島）
フェファン島（秋島）
小田島水道
0
10
20
30
km



高速戦艦「赤城」6

「赤城」永遠

第一章　サイパンの襲撃者

1

母艦から目的地の上空まで、若干の時間を要した。
攻撃隊は、合衆国海軍の主力艦上戦闘機グラマンＦ４Ｆ〝ワイルドキャット〟八〇機と、同じグラマン社が開発した新鋭艦上戦闘機Ｆ６Ｆ〝ヘルキャット〟だ。
Ｆ６ＦとＦ４Ｆの巡航速度には、さほど大きな差はないが、Ｆ４Ｆは主翼の下に二〇〇ポンド爆弾二発を提げているため、速力が低下している。
このため、Ｆ６ＦもＦ４Ｆに速度を合わせていた。
「『オーク1』より全機へ。左一〇度、サイパンとテニアン」
「イントレピッド」戦闘機隊隊長ロバート・アダムス中佐の声が、レシーバーに響いた。
「エセックス」戦闘機隊隊長ヘンリー・ミラン少佐は、右後方に見える太陽に注意を払った。
警戒しなければならないのは、陽光を背にしての奇襲だ。
巡航速度よりも低速で飛んでいるところに不意打ちを受ければ、新鋭機といえども、あっさり墜とされる。
今回の作戦は、クェゼリンを攻撃した日本艦隊を叩くだけではない。新鋭機Ｆ６Ｆの実戦テストも兼ねている。貴重な新鋭機を無為に失うなど、許されることではない。
距離が詰まるにつれ、二つの島が拡大する。
北側に位置する島がサイパン島だ。
その南東岸にあるラウラウ湾に、日本艦隊がいるはずだった。
「『オーク1』より全機へ。目標視認」
再び、アダムスの声が響いた。
サラダボウルのような形状の湾内に、一群の艦船が見える。
ほとんどは、湾口付近にいるようだ。湾外への脱

出を図っているらしい。

「『オーク1』より『オーク』『パイン』。『オーク』目標一、二番艦。『パイン』目標三、四番艦。今より攻撃する」

「『パイン1』、了解！」

アダムスの命令に、「バンカー・ヒル」[1]戦闘機隊[2]隊長ジョセフ・ウッドワース少佐が返答し、F4Fが高度を下げ始める。

F4Fの役割は、二〇〇ポンド爆弾による敵空母への攻撃だ。日本艦隊の正規空母四隻に、F4F二〇機ずつを割り当てる。

二〇〇ポンド爆弾は、ダグラスSBD〝ドーントレス〟が搭載する一〇〇〇ポンド爆弾に比べて威力が小さいが、飛行甲板に破孔を穿ち、発着艦不能に陥れることはできる。

クェゼリンの飛行場を使用不能にし、数万の将兵を殺傷した敵機動部隊への報復としては物足りないが、敵空母四隻を戦列外に去らせるだけでも、戦術的な意義は大きい。

「前上方、敵機！」

不意に、部下の叫び声がレシーバーに響いた。

ミランは、咄嗟に顔を上げた。

多数の機影が前上方から、VF10目がけて降下して来る様が見えた。

「『セコイア』、かかれ！」

叩き付けるように叫ぶや、ミランは操縦桿を手前に引き、エンジン・スロットルをフルに開いた。

F4Fに比べ、二トン以上も重くなった機体だが、エンジン出力も一二〇〇馬力から二〇〇〇馬力にパワーアップされている。空冷複列星型一四気筒エンジンは、力強い爆音を上げ、F6Fの機体を高みに引っ張り上げてゆく。

「出て来やがったか、零戦！」

ミランは敵愾心を込めて、敵機にその言葉を投げつけた。

合衆国の戦闘機乗りにとり、仇敵とも呼ぶべき

機体だが、Ｆ６Ｆなら負けない。格闘性能では一歩譲るものの、他の性能ではジークを上回る機体だ。

今までの借りを、まとめて叩き返してやる。

敵の機影が、みるみる膨れ上がる。機首は、鏃のように尖っている。

「二式艦偵……？」

「ジークじゃない！」

ミランの呟きに、誰かの叫び声が重なった。

敵機の機首に発射炎がほとばしり、太い曳痕が向かって来た。ジークのものと同じ、二〇ミリ弾のようだ。

敵弾がコクピットをかすめ、後方に通過する。

ミランも一二・七ミリ弾を放つが、敵機を捉えることなく、大気だけを貫く。

Ｆ６Ｆと敵機が、猛速ですれ違う。

ジークでも、ジュディでもない。機首が尖っているところから、液冷エンジンの装備機であろうと推測するだけだ。

敵の後続機が襲って来る。正面上方から、太い火箭を撃ち込んで来る。

コクピットの脇を真っ赤な曳痕が通過し、風防ガラスが不気味な音を立てて振動する。

ミランも射弾を放つが、一二・七ミリ弾が敵機を捉えることはない。相対速度が大き過ぎるためだろう、互いに機銃弾をばら撒くだけだ。

「『セコイア３、４』被弾！」

「くそったれ！」

飛び込んだ報告に、ミランは罵声を放った。

ジークを圧倒し、Ｆ６Ｆの能力を実証するはずが、全くの見込み違いだ。

未知の新型機に、Ｆ６Ｆが二機も墜とされている。

「『セコイア２』続け！」

二番機を務めるジェームズ・ベーカー大尉に命じ、ミランは左の水平旋回をかけた。

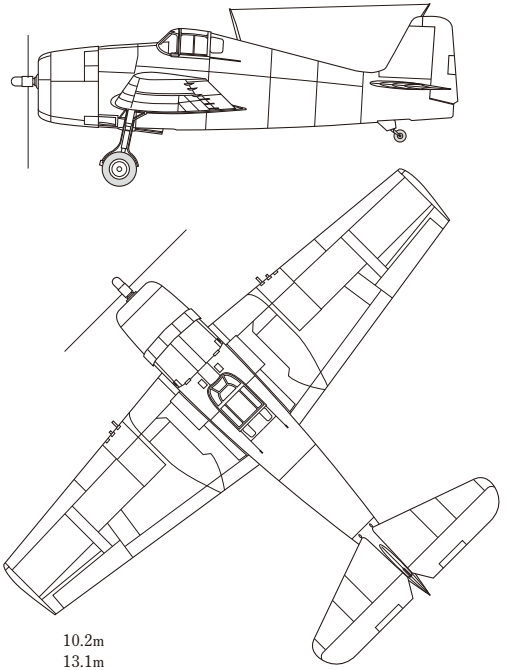
ＶＦ10の編隊は、大きくかき乱されている。

旋回格闘戦に入る機体はない。日本軍の新鋭機は、

一撃離脱に徹しているようだ。
敵機が次々に反転し、ＶＦ10に機首を向ける。
「『セコイア1』より各隊。二機以上で戦え！」
ミランは、麾下全機に早口で指示を送った。
Ｆ４Ｆに搭乗していたとき、
「ジークとは、単機での戦闘は避けよ。二機以上で連携を取りながら戦え」
と、空母の艦長や飛行長から、繰り返し命じられている。
この新型機とも、その原則に従って戦うべきだ。
ＶＦ10が小隊毎に分かれ、敵機に立ち向かう。
敵機も四機、あるいは二機一組で、Ｆ６Ｆに向かって来る。
（陸軍機だな）
ミランは、そう直感した。
日本海軍の戦闘機隊は、一個小隊を三機で編成しているが、日本陸軍は二機を最小単位としている。
敵の新型機が四機、あるいは二機一組で行動している以上、陸軍機とみて間違いない。
グアム島の陥落後、マリアナ諸島の上空や周辺海域で、日本陸軍の戦闘機や軽爆撃機の姿が確認されたとの情報もある。
合衆国が、陸軍機であるボーイングＢ17〝フライング・フォートレス〟やロッキードＰ38〝ライトニング〟を投入しているのと同じように、日本もまた、陸軍機をマリアナ諸島に派遣したのだ。
敵の新型機が二機、ミランの小隊に向かって来る。
二対二の対決だ。
猟犬の鼻面のように尖った機首や角形に成形された主翼が、目の前に迫る。
「くたばれ！」
一声叫ぶや、ミランは機銃の発射ボタンを押した。
両翼に発射炎が閃き、おびただしい曳痕がほとばしった。
六丁の機銃から放たれる一二・七ミリ弾は、古代の剣闘士が使っていた投網のようだ。無数の銃弾で

網をかけ、敵機を搦め捕る。
敵機はいち早く右に横転して垂直降下に転じ、ミラン機の射弾に空を切らせた。
素早さでは、ジークに劣らない機体だ。横転から降下に移る際の素早さは燕を思わせる。
「『セコイア1』、後方に敵機！」
「ウィーブ！」
ベーカーの叫び声が届くなり、ミランは指示を下した。
二機が機を織るように、ジグザグ状に飛び、敵を誘い込む戦法だ。
一機が背後を取られても、もう一機が横合いや後方から射弾を浴びせ、撃墜する。ミランとベーカーのコンビは、F4Fに乗っていたとき、この戦術で四機のジークを墜としている。
ミランは操縦桿を右に、あるいは左にと倒し、水平旋回を繰り返す。
バックミラーには、食らいついて来る敵の新型機が映っている。
旋回性能はジークほどではないものの、速度性能では勝るようだ。ミラン機との距離を詰めて来る。
「まだか、ベーカー。まだか⁉」
ミランはベーカーに呼びかけた。
ウィーブ戦法が機能していない。このままでは、敵の新型機に墜とされる。
何かが壊れるような音と苦悶の声が、レシーバーに入った。
「ベーカー！」
ミランの呼びかけに応える声はない。
ベーカー機は、敵の新型機に墜とされたのだ。
敵機をウィーブ戦法に引き込むつもりが、逆に引き込まれていたのかもしれない。
ミランは歯噛みをしつつ、操縦桿を左に倒した。
F6Fは、左の翼端を下にして垂直降下に入った。
旋回格闘戦で敵機に追い詰められたときに有効な手だ。ミランは過去の戦いで、何度かこの戦法を用

アメリカ海軍 F6F-3 ヘルキャット



全長	10.2m
翼幅	13.1m
全備重量	5,704kg
発動機	P&W R-2800-10W 2,000馬力
最大速度	599km/時
兵装	12.7mm機銃×6丁(翼内)
乗員数	1名

米海軍の最新鋭艦上戦闘機。同時期に試作されたヴォート社のF4Uに飛行性能では一歩譲るものの、F4Fの流れを汲む堅実な設計が評価され、制式採用が決まった。F4Fの長所である堅牢さや生産性を重視した設計はそのまま踏襲しつつ、実戦での運用で得られた問題点を解消することで、より実用性の高い戦闘機に仕上がっている。ことにエンジンの出力向上で得られた余裕を防弾装備に回すことで、搭乗員の生存率を高めたことは、開戦劈頭、多数の空母を搭乗員もろとも喪失し、いまだ戦力回復途中にある米海軍航空隊に喜ばれている。日本海軍の主力戦闘機「零戦」にも充分対抗できると期待されている。

い、ジークを振り切ったことがある。
Ｆ６Ｆの機体が、サイパン南東沖の海面を指して降下する。急降下速度は、Ｆ４Ｆのそれより大きい。海面が、急速に近づいて来る。
「ついて来られるか、ジャップ！」
後方の敵機に呼びかけたとき、それに応えるかのように、ミラン機のコクピット脇を火箭がかすめた。
バックミラーに、敵の新型機が映っている。
ミラン機との距離を、じりじりと詰めて来る。
「馬鹿な……！」
ミランは、現在の状況が信じられなかった。
Ｆ６Ｆは、対日戦の切り札とも呼ぶべき機体だ。
二〇〇〇馬力エンジンの圧倒的なパワーと甲冑騎士にも喩えられる分厚い防弾装甲、一二・七ミリ機銃六丁の火力でジークを圧倒し、制空権を掴み取るはずだったのだ。
その新鋭機が、敵機に翻弄されている。
ＶＦ10指揮官の自分が、直率する小隊の僚機を全て失い、追い詰められている。
「ならば！」
ミランは、操縦桿を目一杯手前に引いた。
下向きに強烈な遠心力がかかり、束の間、体重が数倍に増えたような気がした。
急降下をかけていたＦ６Ｆが、一転して上昇に転じる。
Ｆ６Ｆはエンジン出力に余裕があるため、垂直面での格闘戦を得意としている。宙返りでの勝負なら、こちらに分があるはずだ。
Ｆ６Ｆが宙返りの頂点に達し、再び降下する。
首をねじ曲げ、頭上を見ると、食い下がって来る敵機が見える。
機体形状はイギリスのホーカー・ハリケーンに似ているが、速度性能、運動性能共にハリケーンを上回るようだ。
日本がイギリスから入手したハリケーンを参考にして、独自開発した機体かもしれない。

ミラン機は、二度目の宙返りに入る。
二〇〇〇馬力の出力を持つエンジンが、機体を高みに引っ張り上げ、空中に円を描いてゆく。
ミラン機が宙返りの頂点に達したとき、真下から噴き延びる火箭が目に入った。
（当たる！）
背筋に冷たいものを感じたとき、敵弾は右の翼端付近をかすめ、虚空へと消えた。
敵機は、なおも追って来る。
宙返りによって敵機の背後を取るつもりだったが、距離はなかなか縮まらない。
ミランが三度目の宙返りに入ろうとしたとき、敵機が横転する様子がバックミラーに映った。
垂直面の格闘戦では勝てぬと見て、離脱したのかもしれない。
空中戦の戦場が、視界に入って来た。
Ｆ６Ｆと敵の新鋭機が混淆し、赤や青の火箭が縦横に飛び交っている。
Ｆ６Ｆも、敵機も、動きは直線的だ。
猛速で突っ込んでは、目標に一連射を浴びせる。
射弾を放った後は、まっすぐに飛び抜けるか急降下に転じ、一旦その場から離脱する。
騎士同士の槍試合を、同時に数十箇所で行っているかのようだ。
時折、被弾した機体が火を噴く。
速力が衰えたＦ６Ｆに、敵戦闘機が後方から一連射を浴びせて止めを刺す。
Ｆ６Ｆに容赦のない一撃を見舞った敵機にも、新たなＦ６Ｆが前上方から突進し、両翼から無数の一二・七ミリ弾を叩き付ける。
銃弾の投網は、エンジン・カウリングを撃ち抜き、主翼に破孔を穿ち、補助翼を吹き飛ばす。
一瞬で、金属製の襤褸と変わった日本機は、サイパン沖の海面目がけ、真っ逆さまに落下してゆく。
どちらが優勢なのかは判然としない。
機数はＶＦ10の方が多いようだが、敵の新鋭機は

敏速に飛び回り、数に勝るＦ６Ｆと互角に渡り合っているようだった。

「Ｆ４Ｆはどうなった？」

肝心なことを思い出し、ミランはラウラウ湾に視線を向けた。

湾口付近に立ち上る煙が、視界に入って来た。

2

サイパンから出撃した陸軍戦闘機隊と、米軍機との空中戦は、第四艦隊の各艦からも遠望されたが、司令部や各艦の乗員は、それどころではなかった。

約八〇機と見積もられる敵機が、上空から迫りつつあるのだ。

七月一六日にクェゼリン攻撃を成功させた後、第四艦隊は北に迂回しつつサイパン島を目指し、二〇日未明にラウラウ湾に入港した。

同艦隊は入港後、直ちに燃料、弾薬の補給作業を開始したが、そのさなかに索敵機より、

「敵艦上機、大挙『サイパン』ニ向カヒツツアリ」

との緊急信が入ったのだ。

「補給作業、一時中止。全艦、湾外に避退せよ！」

司令長官角田覚治中将は、即座に下令した。

ラウラウ湾の中では艦の動きが制約され、被弾確率が上がる。

行動の自由が利く外洋に出た方が、敵弾を回避できる可能性が高いとの判断だ。

旗艦「翔鶴」を始めとする空母六隻、軽巡三隻、駆逐艦一〇隻は、周囲の海面を激しく泡立たせながら湾外への脱出を開始した。

四艦隊は空襲を予期しておらず、空母の飛行甲板に直衛戦闘機隊の姿はない。

サイパン、テニアンに展開する第二二、二三航空戦隊隷下の戦闘機隊と、サイパン島に配備された陸軍第五飛行師団隷下の飛行第五〇戦隊が迎撃に上がっているが、全機を阻止し切れるとの保証はない。

味方の戦闘機隊が防ぎ切れなかった敵機は、対空砲火と回避運動によって防ぐ以外にない。

「通信より艦橋。戦闘機隊指揮官より報告。『敵機ハ艦戦ノミ』」

「艦戦だけだと⁉　確かか？」

通信参謀井村高雄少佐の報告を受け、首席参謀増田正吾中佐が聞き返した。

空母を攻撃するのであれば、戦爆連合を繰り出すのが定石だ。敵の指揮官は何を考えているのか、と言いたげだ。

「Ｆ４Ｆは小型爆弾二発を搭載できます。空母の甲板を破壊し、発着艦不能に陥れるつもりかもしれません」

「その手で来たか」

航空甲参謀入佐俊家中佐の推測を聞き、角田は唸り声を発した。

米艦隊の指揮官は、空母の撃沈ではなく、戦闘不能に追い込むことを狙っているのだ。

「全艦に打電せよ。『敵戦闘機ハ爆装ナリ。厳重注意』！」

角田は、井村通信参謀に命じた。

第四艦隊の前方上空では、空中戦が始まっている。

二二、二三航戦の零戦が、Ｆ４Ｆの前上方から挑みかかったのだ。

「敵一機撃墜！　また二機撃墜！」

旗艦「翔鶴」の見張員が、歓声混じりの報告を上げた。

零戦はＦ４Ｆの前上方から突っ込んでは一連射を浴びせ、後ろ上方へと抜ける。

あるいは横合いから仕掛け、コクピットや主翼の付け根に一連射を叩き込む。

Ｆ４Ｆも零戦に射弾を放つが、一二・七ミリ弾の火箭は空を切る。

機体を振ってかわそうとするＦ４Ｆもあるが、零戦は逃がさない。

両翼から放つ二〇ミリ弾は、主翼を叩き折り、エ

ンジン・カウリングを引き裂き、コクピットを直撃して搭乗員を射殺する。

F4Fの後方から喰らいつく零戦もある。

常であれば、F4Fも水平旋回をかけて零戦と格闘戦に入るか、急降下に転じての離脱を図るところだが、この日のF4Fは動きが鈍い。

零戦をかわそうとしても、容易に距離を詰められ、背後から二〇ミリ弾の火箭を撃ち込まれる。

主翼を叩き折られたF4Fは回転しながら墜落し、胴体を引き裂かれたF4Fはよろめきながら高度を落とす。

角田が空母部隊の指揮を執るようになってから一年以上が経つが、戦闘機同士の空中戦が、これほど一方的に推移するのは初めてだ。

零戦はこれほど強かったのか。あるいは、F4Fが弱いのか。

「F4Fは爆弾を搭載し、動きが鈍っています。空戦性能で零戦に劣る機体が爆弾を搭載したのでは、零戦に勝てる道理がありません」

「戦闘機を爆撃機に仕立てた米軍の失敗ということか」

参謀長岡田次作少将の発言に、角田は頷いた。

これなら、零戦だけで全機を阻止できるのでは、と期待したが——。

「敵約一〇機、本艦の左二〇度、高度三〇（三〇〇〇メートル）！」

「『紅鶴』に急降下！」

見張員の報告が、続けて飛び込んだ。

「取舵一杯」

「とぉーりかぁーじ、いっぱぁーい！」

「翔鶴」艦長岡田為次大佐が大音声で下令し、航海長中村次郎中佐が操舵室に命じた。

「翔鶴」は、すぐには回頭を始めない。

全長二五八メートル、水線幅二六メートル、基準排水量二万五六七五トンの大型艦だ。舵が利き始めるまでには、相応の時間がかかる。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。